

館内案内図



- | | | |
|-------------|------------|-----------------|
| ① 正門受付 | ⑨ 三楽亭 | ⑲ おみやげ処 三楽 |
| ② 中門受付 | ⑩ 集古館 | ⑳ 地酒館 |
| ③ 土蔵門 | ⑪ 刈羽古民家 | ㉑ 豪農の宿 大呂菟 |
| 屋根裏ギャラリー | ⑫ 吉ヶ平古民家 | ㉒ 西門広場 |
| 伊藤邸 主屋棟 | ⑬ 常盤荘(茶室) | ㉓ 第2庭園 |
| ④ 台所・茶の間 | ⑭ しだれ桜 | ㉔ トイレ |
| ⑤ 考古資料室(2階) | ⑮ 大落棚 | ♿ 身障者用駐車場 |
| 伊藤邸 大広間棟 | ⑯ ハス池 | ㉕ マイクロバス・乗用車駐車場 |
| ⑥ 大広間 | ⑰ そば処 いはの家 | ㉖ 大型・マイクロバス駐車場 |
| ⑦ 回遊式庭園 | ⑱ 茶房 井戸小屋 | ㉗ 乗用車駐車場 |
| ⑧ 気を癒やす石 | ⑲ 大食堂 みそ蔵 | |

北方文化博物館

NORTHERN CULTURE MUSEUM

〒950-0205 新潟県新潟市江南区沢海2丁目15-25

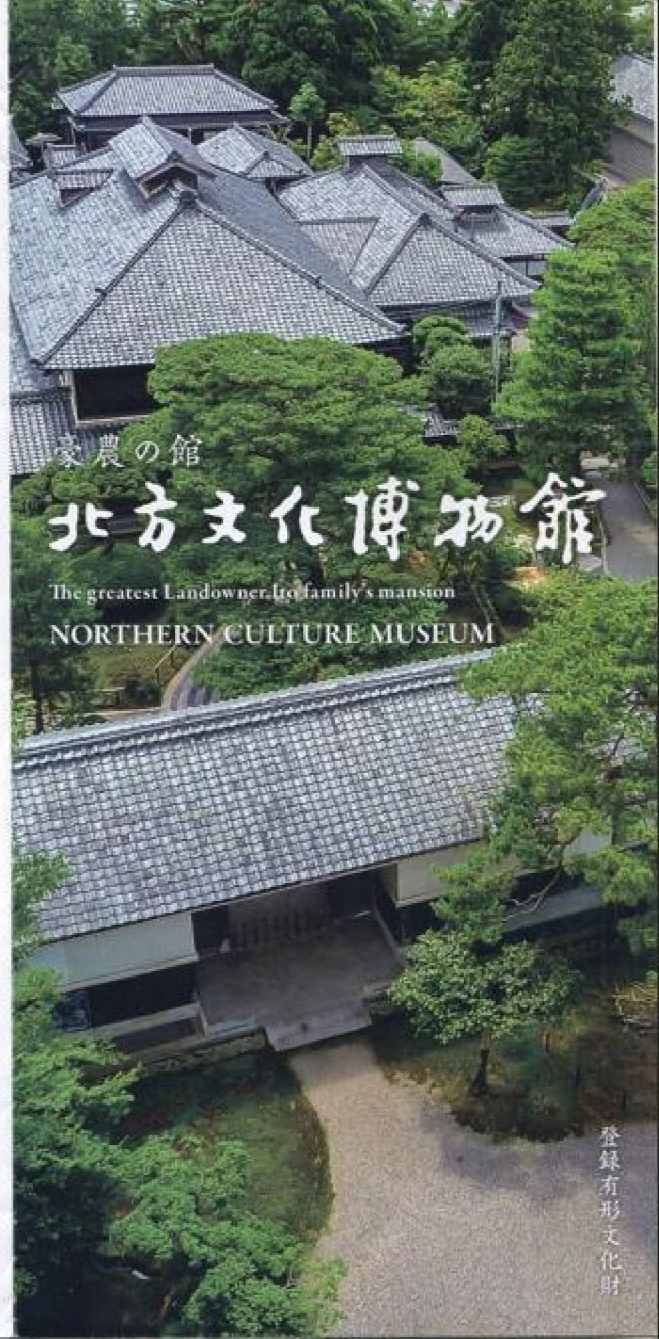
TEL 025-385-2001 FAX 025-385-3929

<https://hoppou-bunka.com>

開館時間

4月～11月 9:00～17:00

12月～3月 9:00～16:30 (年中無休)



豪農の館

北方文化博物館

The greatest Landowner's family's mansion

NORTHERN CULTURE MUSEUM

登録有形文化財



越後路の郷愁 豪農の館

越後の蒲原平野をよぎる大河・阿賀野川の西岸にある小さな集落を「沢海」という。

江戸時代中期、この地に農より身を起こし、代を重ねて豪農の道を歩み、

やがて巨万の富を築き、

越後随一の大地主となった一族があった。

これが伊藤家である。

明治に入り、次第に農地の集積を計り、

全盛期には一市四郡六十四ヶ町村に

一三七〇余町歩(1,370万㎡)の田畑を所有、

昭和期には景下一となり

作徳米は三万俵余であった。

しかし、時代は変わり戦後農地解放により

これらの土地は伊藤家の所有から離れた。

明治十五年から八年がかりで建てられた

伊藤家の豪壮な本邸は

敷地八千八百坪(29,100㎡)、

建坪千二百坪(3,960㎡)、

部屋数六十五を数える純日本式住居で、

終戦半年後の昭和二十一年、遺構保存のため、

「財団法人 北方文化博物館」が創設され、

これに全部寄附されたものである。

長年の風雪に耐え、往時の面影をそのままに

豪農伊藤家の暮らしを今に伝えてくれる。

平成十二年四月には、

国の登録有形文化財に登録された。



大広間 座敷

美しい庭園に面した座敷は冠婚葬祭など、特別な行事に年に数回使われた。大広間は柱、天井、式台から戸に至るまで全て檜造り。特に式台と戸は一枚板を使用、雨戸26枚が収まる戸袋や、座敷を囲む廊下には柱が一本もない釣欄間など、全てが贅を尽くした造り。床の間を挟んで7つの部屋があり、畳の数は全部で100枚にも及ぶ。

パワースポット

気を発する石

館内は伊藤家の先祖が積み上げてた徳により不思議な「気」のエネルギーが満ちていて荘厳な癒やしの空間が広がる。特に大広間に面した中庭の御影石が良い「気」を発しているとされる。



庭園

中央泉池に各地の名石を配した、鎌倉・室町の古式によって造られた回遊式庭園である。庭園内には5つの茶室が点在する。青苔の美しさと相俟って庭の格調を高めている。この庭は、京都・銀閣寺ゆかりの庭師 田中泰阿弥(新潟県柏崎市出身)により5年がかりで造られた。

三楽亭間取図



三楽亭

世にも希なる正三角形の小亭で建坪11坪余の書斎兼茶室である。柱、建具、畳の殆どが三角形や菱形等の独創的な建物で入念な細工は他に類例がない。

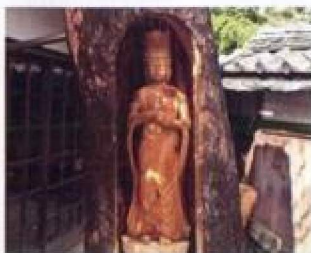


集古館

白壁と張り瓦の美しい土蔵造りの建物はもともと飯米蔵で2,000俵の米俵が積まれていた。今は歴代当主の収集した美術品などを展示。

古民家

敷地内には、新潟県内の刈羽地区・吉ヶ平地区より移築した古民家を保存。建立はそれぞれ江戸初期・明治初期。当時のままに残された内部からは、かつての農民の姿が偲ばれる。



赤松洞穴 大日如来立像

5代文吉が手植えしたときれる樹齡350年の赤松が枯れた際に、松と先祖の供養の爲、8代文吉が松の下部を繰り抜き祠とし、その松で大日如来立像を彫り建立した。



茶の間

三間続きの茶の間は当時、当主が来客を迎えた部屋で、戸を開け放てば27畳の広さ。南側廊下には16間半(30m)の一本杉の丸桁がいかだによって、遠く会津廻りから阿賀野川をいかだで運ばれた。



台所・囲炉裏

当時、50人余の従業員が働いており、台所にある竈で60kg(1俵)の米を毎朝炊いていたという。また、六尺(1.8m)四方の囲炉裏には一度に16人が座ることができる。

